

千葉県袖ヶ浦市

たきのくちむこうだい

滝ノ口向台遺跡（3）

—携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2018

KDDI株式会社北関東エンジニアリング

袖ヶ浦市教育委員会

序 文

袖ヶ浦市は、房総半島の東京湾沿岸中央部に位置し、市域北部には下総台地の南端である袖ヶ浦台地、東部から南部にかけては丘陵地帯が続き、中央部には小櫃川によって開析された低地が広がっています。また、豊かな環境から古来より人々の生活が連綿と築かれており、市内には500箇所を超える埋蔵文化財が所在しています。市内台地部は住宅地として開発が進み、沿岸部は工場地帯として発展する中で、埋蔵文化財の保護を図りつつ、開発事業との調整を進めてまいりました。

今回、携帯電話の無線基地局建設にあたり発掘調査を実施した滝ノ口向台遺跡は、南東部に広がる丘陵地帯に位置し、過去の調査成果から旧石器時代より生活が営まれていたことがわかっています。今回の調査では、狭小範囲ながらも縄文時代の人々の生活の痕跡を確認できました。

この度、調査成果として発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。本書が埋蔵文化財の重要性について理解と関心を深めていただく資料として、市民の皆様に広く活用していただけたら幸いです。

最後に、発掘調査にご指導・ご協力をいただきましたKDDI株式会社北関東エンジニアリング並びに千葉県教育委員会文化財課をはじめ、関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

平成30年3月

袖ヶ浦市教育委員会
教育長 御園 朋夫

例 言

1. 本書は、千葉県袖ヶ浦市滝の口字原井作 28 番地 2 に所在する滝ノ口向台遺跡（調査コード：S G 123）第 3 次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、携帯電話無線基地局建設に伴うものであり、千葉県教育委員会の指導のもと、袖ヶ浦市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査面積と発掘調査・整理作業の期間、担当者は以下のとおりである。
[調査面積] 13.5 m²
[発掘調査期間] 平成 29 年 8 月 24 日～8 月 31 日
[担当者] 簗島 正広・鎌田 望里
[整理作業期間] 平成 29 年 10 月 6 日～平成 30 年 1 月 9 日
[担当者] 鎌田 望里
4. 本書の執筆は鎌田が担当した。
5. 本書で使用した地形図は下記の通りである。
第 1 図 国土地理院発行 25,000 分の 1 地形図 「上総横田」
第 2 図 袖ヶ浦市発行 2,500 分の 1 地形図 「No. 41」
6. 今回の発掘調査に伴う出土遺物・記録類は、袖ヶ浦市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 基準点測量は世界測地系を用い、方位は座標北を表している。
2. 遺構平面図および土層断面図中の遺構「S K」は土坑を示し、「K」は攪乱を示す。
3. 遺構番号は千葉県文化財センターが行った滝ノ口向台遺跡から検出された遺構を遺構別に精査し、続きの番号を付した。
4. 図の縮尺・凡例は各図に明記した。
5. 土器実測図中の断面に付したドット（■）は胎土に繊維を含むことを表している。

目 次

序文

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

I. 序章	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
3. 遺跡の立地と周辺の遺跡	1
4. 調査及び整理作業の方法	2
II. 検出された遺構と遺物	4
1. 調査の概要	4
2. 土坑	4
3. 出土遺物	4
A. 土器 B. 石器 C. 礫	
III. 総括	5

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図
- 第2図 滝ノ口向台遺跡調査区及び周辺地形図
- 第3図 滝ノ口向台遺跡調査区全体図
- 第4図 調査区及び土坑実測図、土坑出土遺物実測図
- 第5図 出土遺物実測図

表 目 次

- 第1表 出土土器内訳表
- 第2表 出土礫内訳表
- 第3表 完形礫サイズ表

図 版 目 次

- 図版1 調査区完掘全景・検出遺構セクション及び完掘状況
- 図版2 検出遺構セクション及び完掘状況・出土遺物

I. 序 章

1. 調査に至る経緯

平成29年3月15日に、袖ヶ浦市滝の口地区における携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財の所在の有無について問い合わせがあった。照会地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である滝ノ口向台遺跡内にあたる旨の回答をした。現地踏査及び試掘を実施し、事業者と協議を行った結果、13.5㎡を調査対象とした本調査を実施することとなった。

発掘調査及び整理作業は、袖ヶ浦市教育委員会が行った。

2. 調査組織

調査主体 袖ヶ浦市教育委員会

教 育 長	御園 朋夫	教 育 部 長	石井 俊一
教育部次長	高橋 広幸	教育部参事兼生涯学習課長	小阪 潤一郎
生涯学習課文化振興班			
副課長兼文化振興班長	稲葉 理恵	主 査	田中 大介
副主査	簗島 正広	副主査	大河原 務
学芸員	鎌田 望里（担当者）		

3. 遺跡の立地と周辺の遺跡

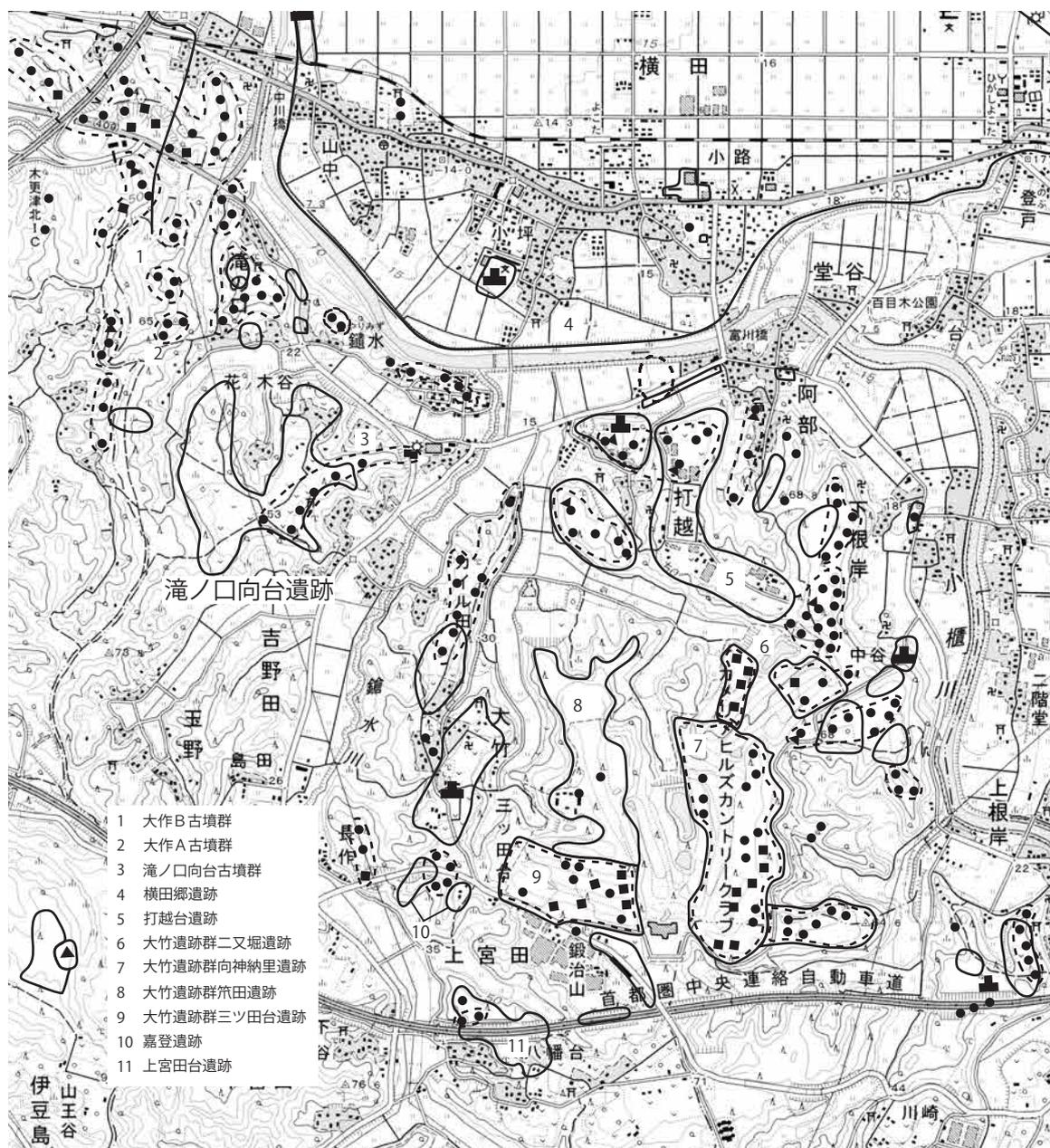
滝ノ口向台遺跡は、袖ヶ浦市南西部の吉野田・滝の口地区に所在する。本遺跡は、木更津台地上に所在し、小櫃川中～下流域の西岸に位置する。本遺跡の東側には小櫃川の支流にあたる鎗水川が北流する。支流によって樹枝状に開析された谷と標高約50m前後のやせ尾根の丘陵が複雑に入り組んだ地形を呈しており、南東側には鎗水川に面して滝ノ口向台古墳群が所在する。本調査区周辺は耕作地となっており、多量の土器が散布している。

昭和63年・平成元年度に千葉県文化財センターが行った調査では、縄文時代早期の包含層と中期の竪穴住居3軒、弥生時代中期の竪穴住居7軒、土坑5基、後期の竪穴住居27軒、方形周溝墓2基、土坑3基、溝2条、古墳時代の方墳4基、円墳1基、土坑7基、中近世の土坑1基が検出されている。縄文時代中期の竪穴住居と弥生時代中期の住居は調査区南端部の緩斜面上に構築されている。

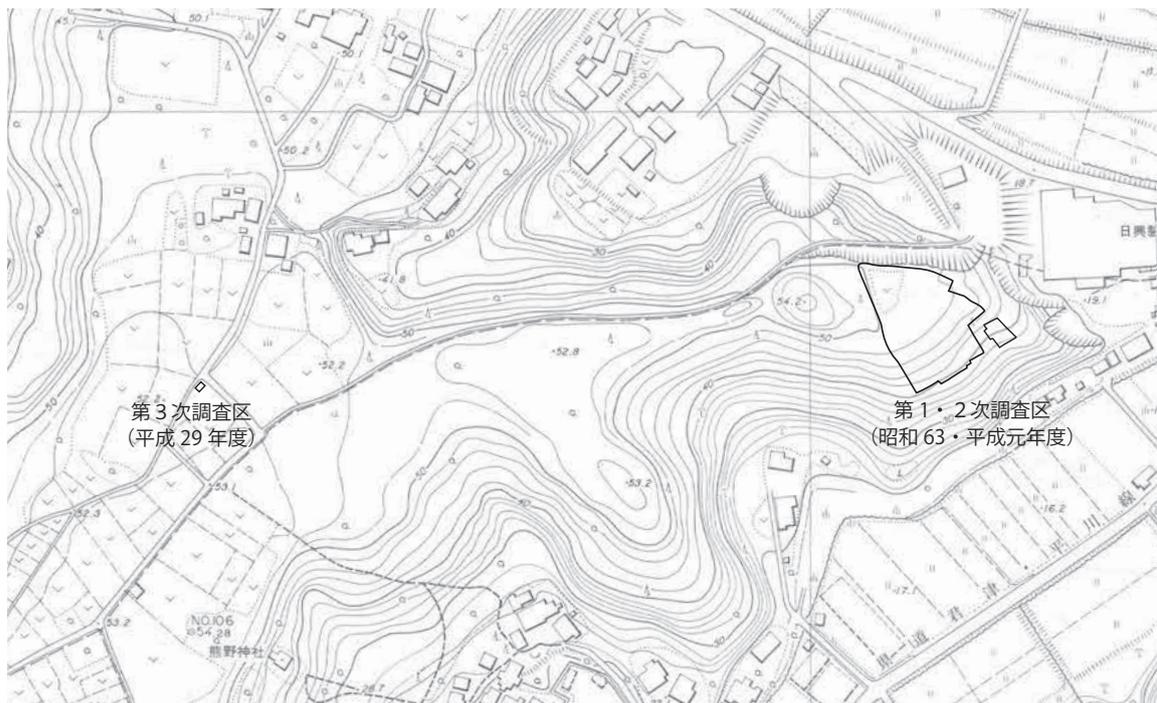
今回の調査では、縄文時代早期と中期の遺構・遺物が検出された。ここでは同時期の遺構・遺物を検出した周辺の遺跡を概観する。鎗水川対岸の舌状台地上に展開される大竹遺跡群向神納里遺跡では、縄文時代早期の竪穴状遺構1基、炉穴17基をはじめ、集石遺構や礫群等が検出されている。縄文時代中期においては、加曽利E式の竪穴住居4軒、土坑18基が検出されている。遺構外からは、旧石器時代～縄文時代後期の遺物が多量に出土しており、縄文時代早期は、条痕文系の土器が主体となり、縄文時代中期は加曽利E式の土器が出土している。向神納里遺跡と同様に、大竹遺跡群二又掘遺跡・笹田遺跡・三ツ田台遺跡においても遺構外から多量の縄文時代の遺物が出土しており、縄文時代早期では撚糸文系～条痕文系の土器、縄文時代中期では加曽利E式の土器が主体となって出土している。大竹遺跡群に隣接する嘉登遺跡では、縄文時代早期の土坑1基、縄文時代中期末葉の柄鏡形住居1軒、土坑5基、ピット5基が検出されている。大竹遺跡群の南部に位置する上宮田台遺跡では、縄文時代早期の集石遺構が1基検出されている。

4. 調査及び整理作業の方法

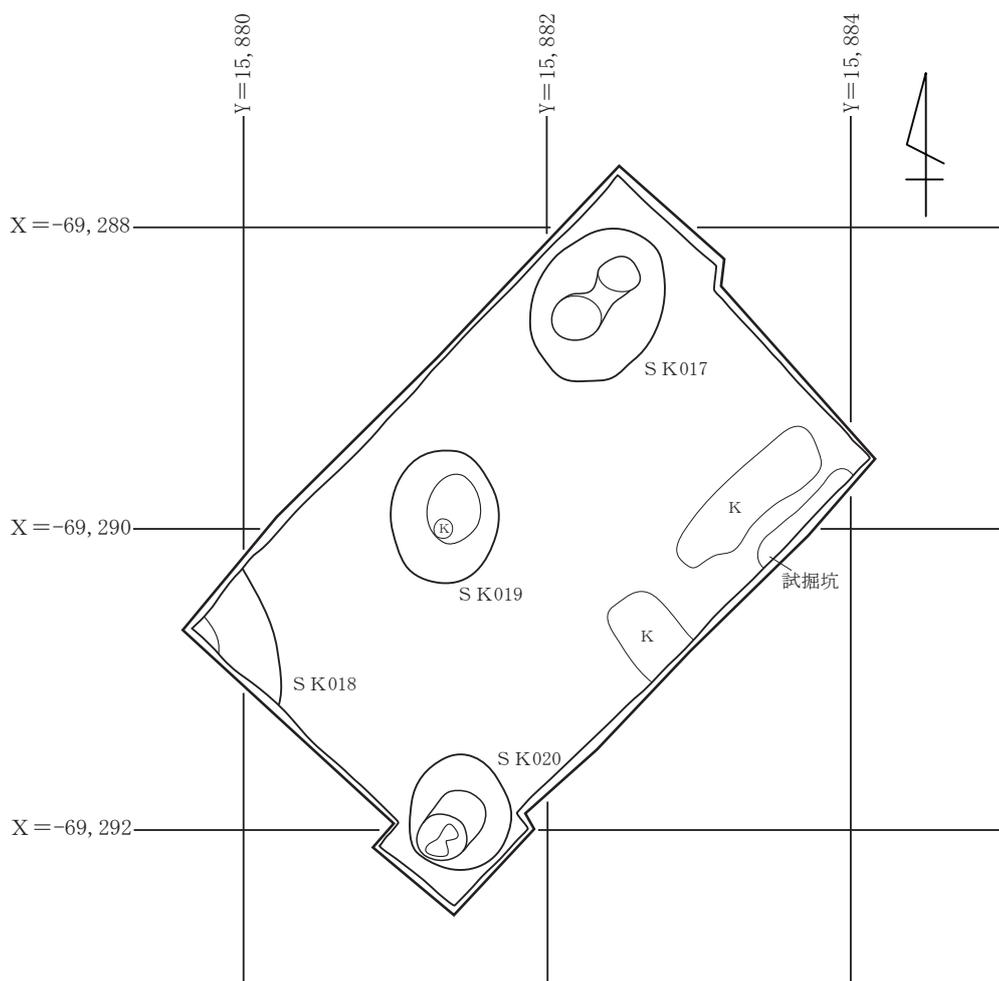
世界測地系に基づく基準点測量による方眼杭を使用した。本調査区全面の表土除去作業をバックホウで行い、漸移層上面を遺構確認面とし、調査を実施した。漸移層（Ⅱ層）からソフトローム層（Ⅲ層）上面までは人力で掘削し、遺構および漸移層下層から出土した遺物は、4桁の数字を付して出土位置を記録した。遺構実測図は平板測量で作成し、実測図の縮尺は20分の1を基本とした。写真撮影は中型カメラをメインカメラとし、フィルムは6×7判を用いた。サブカメラとして35mm小型カメラを使用し、フィルムは白黒とカラーリバーサルを用いた。整理作業における注記については、遺跡コード—遺構名—遺物番号を記した。出土した縄文土器は時期ごとに、早期（捺糸文系、条痕文系、繊維入無文）、中期（勝坂式・阿玉台式・加曾利E式）に分類し、本文及び表中で記載した。礫は石材、大きさ、遺存、被熱で分類した。



第1図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (1:25,000)



第2図 滝ノ口向台遺跡調査区及び周辺地形図 (1 : 4,000)



第3図 滝ノ口向台遺跡調査区全体図 (1 : 50)

Ⅱ. 検出された遺構と遺物

1. 調査の概要

滝ノ口向台遺跡の本調査区からは、縄文時代早期の土坑が3基、時期不明の土坑が1基検出された。漸移層中程まで掘り下げた段階で2基の土坑が検出され、さらにソフトローム層直上まで掘り下げた段階で2基が検出された。遺物は、漸移層上層で礫や縄文時代中期の土器片が多く出土し、漸移層下層で縄文時代早期の土器片と黒曜石の剥片が出土した。耕作の影響を受けており、耕作土直下で漸移層が検出された。本調査区北東側では、試掘を行っており、調査区と重複するため出土遺物を報告書に加えた。

2. 土坑

S K 017 (第4図、図版1)

遺構 標高 52.1 m の漸移層中程で検出された。主軸 N-50° -E、長軸 105 cm、短軸 83 cm、深さ 22 cm であり、平面形は楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、中央部がやや高くなる。

遺物 S K 017- 1 は遺構確認面から出土した。深鉢の胴部とみられ、胎土に繊維を含む。内外面に擦痕が施され、内面は脆弱である。土坑の覆土から黒曜石の剥片が出土した。

S K 018 (第4図、図版1)

遺構 標高 52.1 m の漸移層中程で検出された。北東部以外は調査範囲外のため、平面形・断面形と規模は不明である。検出された部分の深さは 22 cm である。漸移層を掘り込んでいる。

遺物 なし。

S K 019 (第4図、図版1)

遺構 標高 52.0 m のソフトローム層直上で検出された。主軸 N-82° -E、長軸 87 cm、短軸 67 cm、深さ 20 cm であり、平面形は楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、中央部に攪乱を受ける。

遺物 なし。

S K 020 (第4図、図版1)

遺構 標高 52.0 m のソフトローム層直上で検出された。主軸 N-51° -E、長軸 76 cm、短軸 68 cm、深さ 17 cm であり、平面形は楕円形を呈する。断面形は南西側が落ち込み、北東側にゆるやかに立ち上がる。

遺物 S K 020- 1 は土坑の遺構覆土下層から出土した。胎土に繊維を含む。内外面に擦痕が施され、内面は脆弱である。

3. 出土遺物

A. 土器 (第5図、第1表、図版2)

土器は合計 121 点、1,002.10g 出土した。このうち時期・型式が推定できる縄文土器は 57 点、778.82 g であった。重量比で見ると、撚糸文系 9.4%、条痕文系 1.5%、繊維入無文 27.0%、勝坂式 8.8%、阿玉台式 45.7%、加曽利E式 7.6% である。1、2 は撚糸文系である。1 は口縁部片であり、口縁は肥大せず立ち上がる。胴部には縦方向に撚糸文が施文される。胎土は脆弱である。2 は比較的浅い撚糸文が縦方向に施文される。3 は条痕文系である。内面は横方向に外面は縦方向に条痕文が施文される。胎土に繊維を含む。4～6 は繊維入無文である。4 は上方に突帯を持つもので、内外面とも横方向に擦痕が施される。5 と 6 は縦方向に擦痕が施される。6 は底部に近い部分のものとみられ、胎土は脆弱である。色調は外面が明赤褐色を呈するのに対し、内面は黒褐色である。7 は勝坂式と考えられ、貼付区画文内が沈線により方形に区画され、

区画内に縦横の沈線が施文される。色調は暗灰黄色を呈しており、比較的堅緻な焼成である。8～14は阿玉台式である。胎土に金雲母と微細な石英が含まれる。8～11は口縁部片である。8は左右対称に弧状の貼付を持ち、刺突文と押引文が施文される。9は口縁部に刺突文、胴部に押引文が施文される。口縁は波状を呈するとみられる。10・11は文様はなく、口縁内部が肥大する。口縁の傾きから器種は浅鉢と推定される。12は貼付文の両端に連続刺突文が施文される。厚手であり、焼成は脆弱である。13は弧状に押引文が施文される。色調はにぶい黄褐色で、焼成は堅緻である。14は横方向に押引文が施文される。下部に突帯を持つ。阿玉台式は2条の押引文を施すものが多数認められた。15～17は加曾利E式の土器である。15は比較的丁寧な縄文と沈線文が施文される。焼成は堅緻である。16、17は浅めの縄文による縦方向の施文であり、胎土は脆弱である。

B. 石器 (第5図、図版2)

石器は、合計12点、71.33g出土した。製品が2点、二次加工のみられる剥片が1点、剥片・碎片が9点出土した。18の磨製石斧は漸移層上層で出土した。大きさは長軸6.51cm、短軸4.18cm、重量62.21gである。扁平な安山岩の礫の縁辺を打ち欠いて研磨して刃部を作出している。19の石錐は、ソフトローム層直上で出土した。黒曜石の剥片を加工したもので、大きさは長軸2.99cm、重量2.85gで先端部が欠損している。20の二次加工のみられる剥片は、漸移層上層で出土した。黒曜石の剥片を加工したもので、大きさは長軸2.75cm、重量4.06gで、側縁の剥離は下から上方向に施される。剥片・碎片は全て黒曜石であり、ソフトローム層直上で多く出土した。

C. 礫 (第1・3表)

礫は合計54点、1,827.49g出土した。重量比で見ると、チャート18.1%、流紋岩11.7%、砂岩29.2%、泥岩6.4%、石英斑岩11.3%、多孔質安山岩4.9%、凝灰岩7.9%、不明10.5%である。礫の大きさは5cm未満のものがほとんどを占め、大型のものは少なかった。被熱した礫は13点で、全て欠損しており、石材は砂岩に比較的多くみられる。多孔質安山岩は、調査区北西側でまとまって出土した。

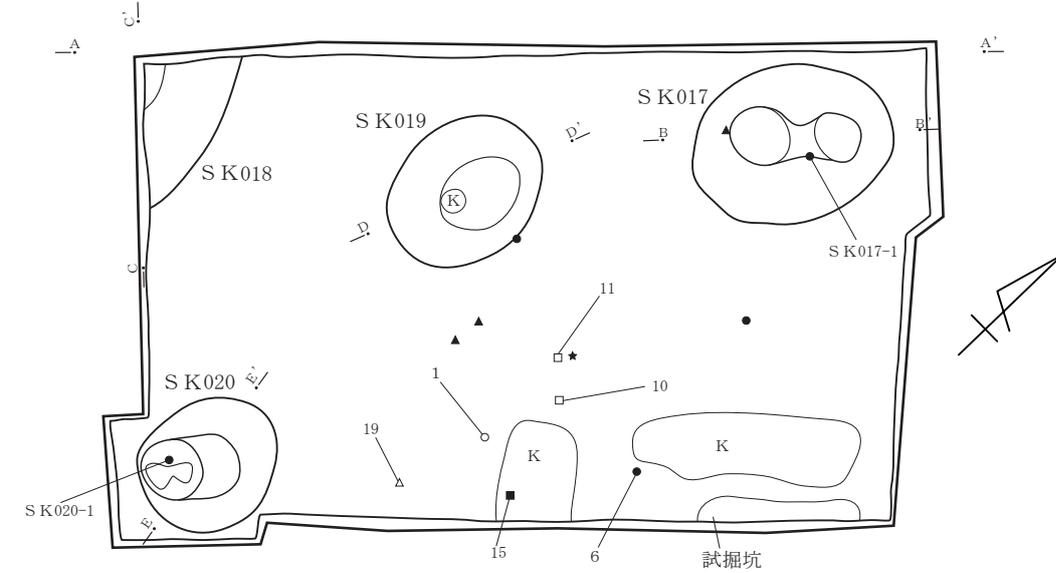
III. 総括

今回の調査では、縄文時代早期・中期の土器が多く出土した。中期の土器が縄文土器全体の60%以上を占めており、なかでも阿玉台式が最も多かった。袖ヶ浦市において阿玉台式が多く出土する例は少なく、本調査区の特徴だといえる。条痕文系、勝坂式は一点のみの出土であった。

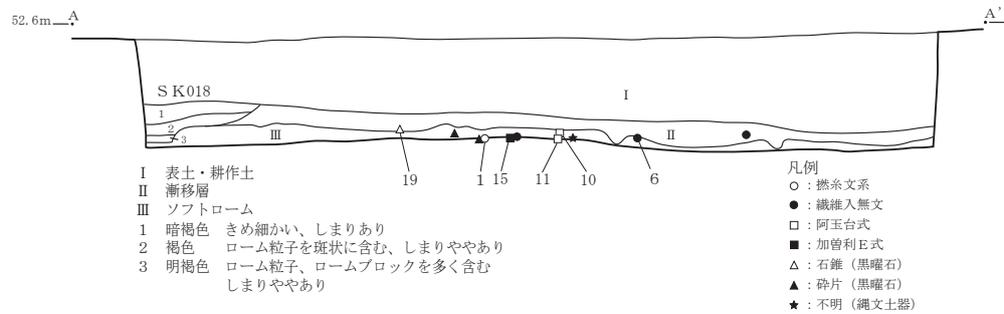
出土した遺物からSK 017、SK 020は縄文時代早期の土坑と推定する。SK 019についてもSK 020と同じ標高から検出されたため、同時期の土坑と思われる。SK 018は掘込み面が確認できず、遺物も出土していないため、時期は不明である。過去の調査では、縄文時代早期の土器は出土しているが、遺構は検出されていないため、本遺跡において初めての縄文時代早期の遺構検出となった。

過去の調査では、縄文時代中期、弥生時代中期・後期の竪穴住居や古墳時代初頭の古墳等の遺構が検出されている。縄文時代中期や弥生時代中期の遺構は、台地縁辺部の傾斜地から多く検出されており、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての遺構は台地平坦部から検出されている。今回の調査区は台地平坦部のため、同時期の遺構の検出が予想されていたが、調査区は耕作の影響からか漸移層中出土の土師器片のみで遺構は確認できなかった。

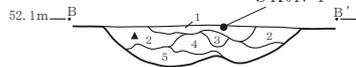
調査区平面図



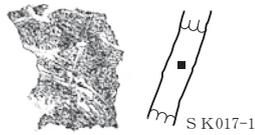
北西壁



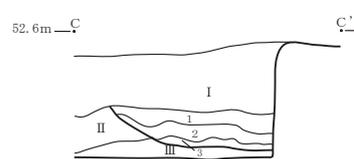
SK017



- 1 明褐色 ローム粒子・ローム粒を比較的多く含む、しまりあり
- 2 暗黄褐色 ローム粒子・ローム粒・黒色土の粒子を含む
- 3 黄褐色 ローム粒子を多量に含む
- 4 暗黄褐色 ローム粒子・ローム粒を含む
- 5 暗黄褐色 ローム粒子・ローム粒を多く含む
黒色土の粒子を含み、1cm大のブロックを形成する



SK018



- 1 暗褐色 きめ細かい、しまりあり
- 2 褐色 ローム粒子を斑状に含む、しまりややあり
- 3 明褐色 ローム粒子、ロームブロックを多く含む
しまりややあり

SK019

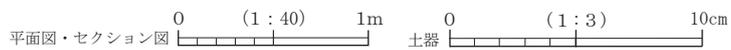
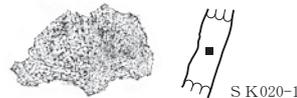


- 1 暗黄褐色 ローム粒子・ローム粒を多く含む
黒色土の粒子を含む
- 2 黄褐色 ローム粒子・ローム粒を多く含む
黒色土の粒子を含み、粘性あり
- 3 明黄褐色 ローム粒子・ローム粒から構成されている
比較的硬質

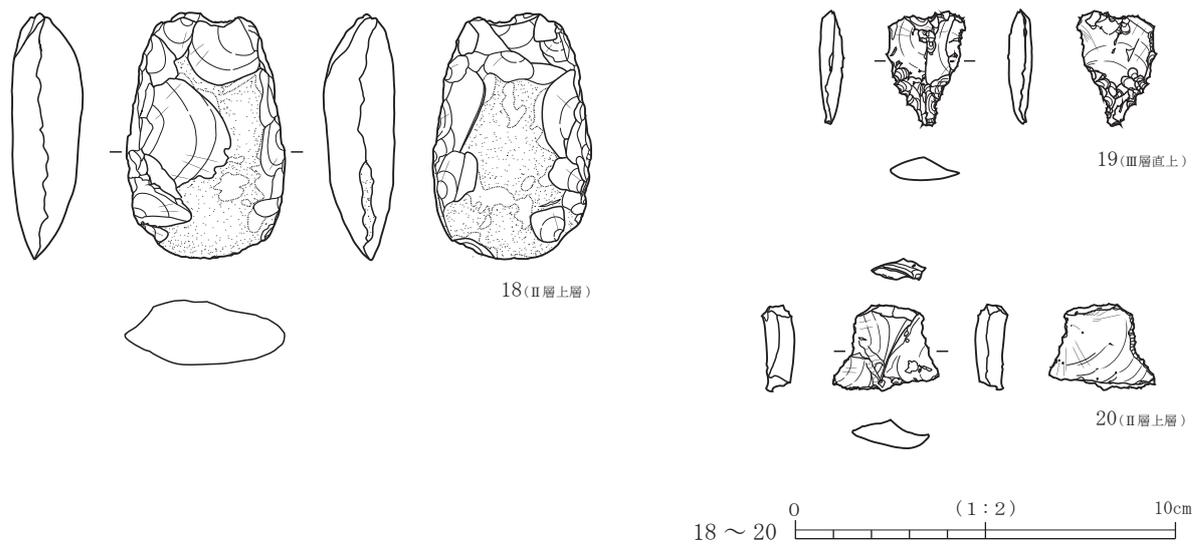
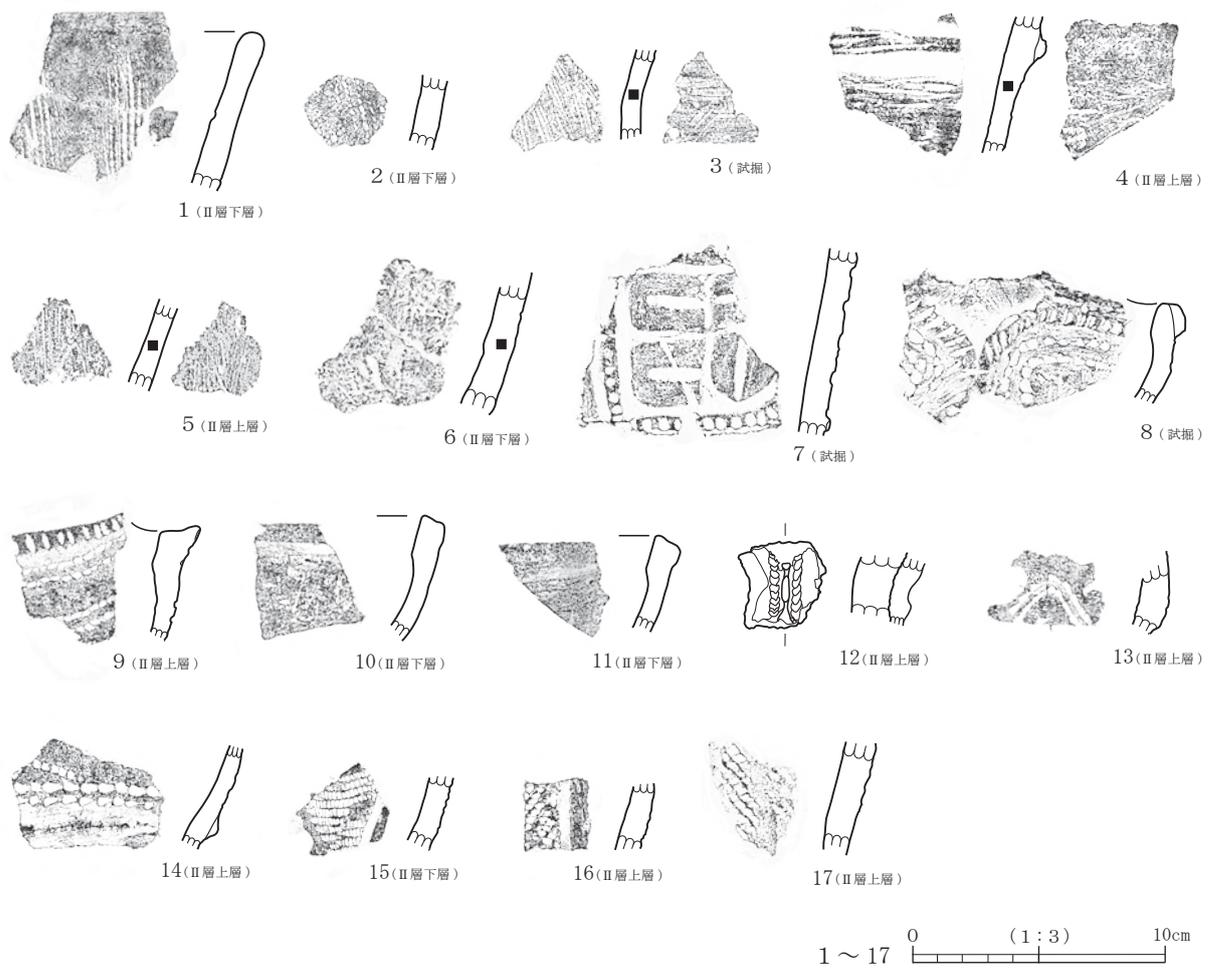
SK020



- 1 暗黄褐色 ローム粒子・ローム粒を多く含む
黒色土の粒子を含む
- 2 明黄褐色 ローム粒子・ローム粒から構成されている
比較的硬質



第4図 調査区及び土坑実測図、土坑出土遺物実測図

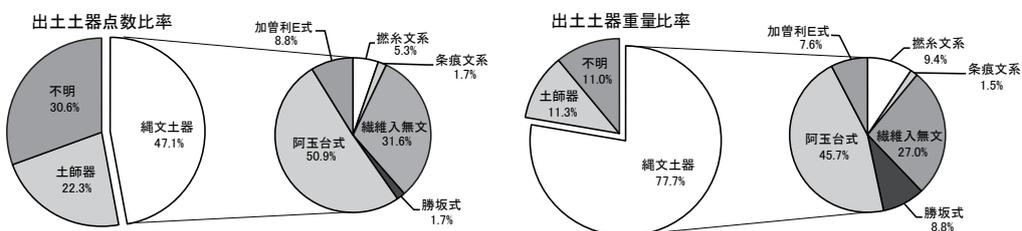


第5図 出土遺物実測図

第1表 出土土器内訳表

	縄文											
	撚糸文系		条痕文系		縄織入無文		勝坂式		阿玉台式		加曾利E式	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
漸移層上層					10	104.10			18	206.54	4	45.92
漸移層下層	3	73.09			4	47.60			2	41.11	1	13.43
土坑					2	45.36						
試掘			1	11.95			1	68.50	9	108.23		
表採					2	12.99						
合計	3	73.09	1	11.95	18	210.05	1	68.50	29	355.88	5	59.35

	土師器		不明		点数合計	重量合計(g)
	点数	重量(g)	点数	重量(g)		
漸移層上層	17	60.08	29	71.67	78	488.31
漸移層下層			7	38.22	19	258.81
土坑						
試掘	8	46.16	1	0.17	20	235.01
表採	2	6.98			4	19.97
合計	27	113.22	37	110.06	121	1,002.10

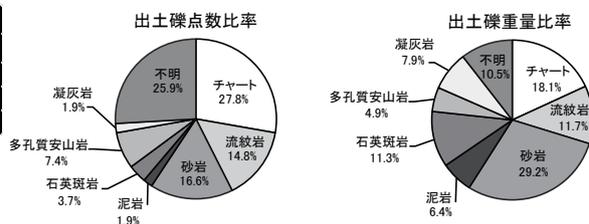


第2表 出土礫内訳表

	チャート		流紋岩		砂岩		泥岩		石英斑岩		多孔質安山岩		凝灰岩	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
完形礫	10	135.34	2	68.82	1	25.55			1	184.05				
欠損礫	5(3)	195.40	6(2)	144.76	8(5)	508.00	1	117.39	1(1)	22.72	4	89.36	1(1)	144.87
合計	15	330.74	8	213.58	9	533.55	1	117.39	2	206.77	4	89.36	1	144.87

	不明		点数合計	重量合計(g)
	点数	重量(g)		
完形礫	5	16.48	19	430.24
欠損礫	9(1)	174.75	35	1,397.25
合計	14	191.23	54	1,827.49

※()は被熱の数を示す。



第3表 完形礫サイズ表

	サイズ(cm)				合計
	SS ~2.9	S 3.0~4.9	M 5.0~6.9	L 7.9~9.9	
チャート	6	3	1		10
流紋岩		1	1		2
砂岩		1			1
泥岩					0
石英斑岩		1			1
多孔質安山岩					0
凝灰岩					0
不明	5				5
サイズ合計	11	6	2	0	19

※礫の大きさの分類については『千葉県袖ヶ浦市 中六遺跡第11・12次発掘調査報告書』の完形礫石材別大きさ内訳表の分類をもとにした。

参考文献

小高春雄 『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』 財団法人千葉県文化財センター 1993

袖ヶ浦市史編さん委員会 『袖ヶ浦市史 資料編 原始・古代・中世』 袖ヶ浦市 1999

西原崇浩 『千葉県袖ヶ浦市 中六遺跡第11・12次発掘調査報告書』 袖ヶ浦市教育委員会 2011

写真図版



1. 調査前全景 (北西→)



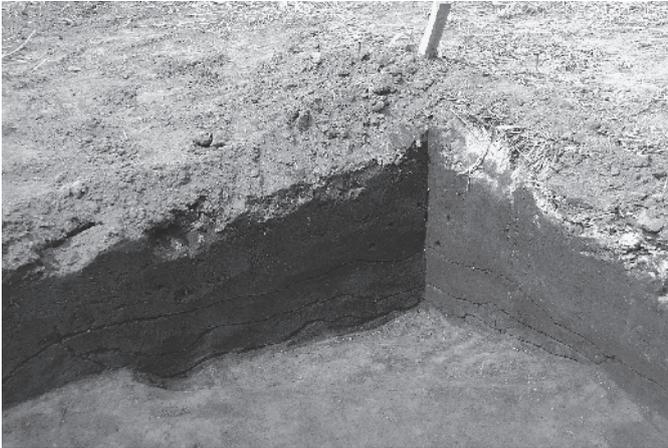
2. 調査区全景 (南東→)



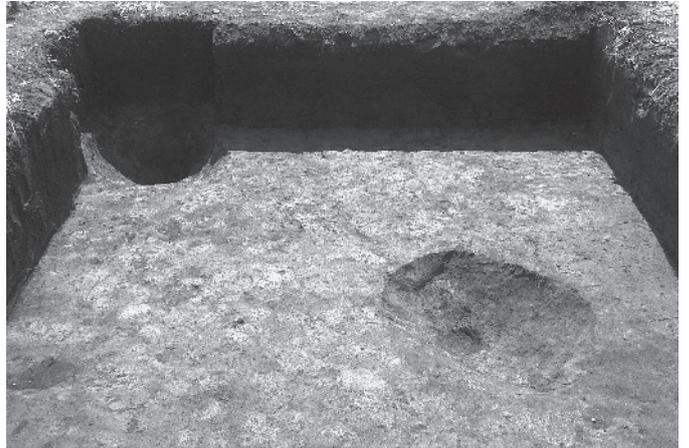
3. SK 017 セクション (南東→)



4. SK 017 完掘 (南東→)



5. SK 018 セクション及び完掘 (北東→)



6. SK 019・SK 020 検出状況 (北東→)



7. SK 019 セクション (東→)



8. SK 019 完掘 (東→)

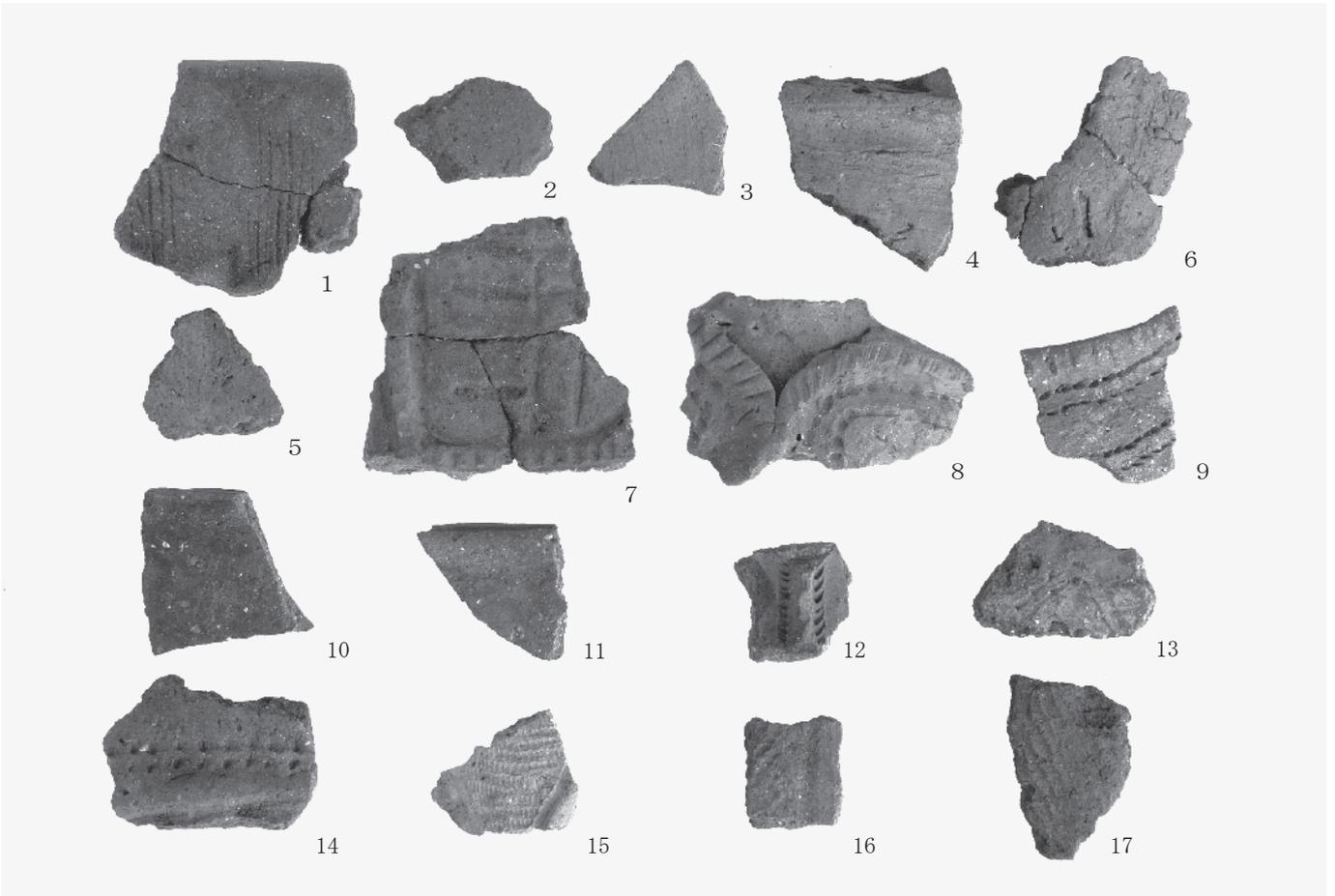
図版2



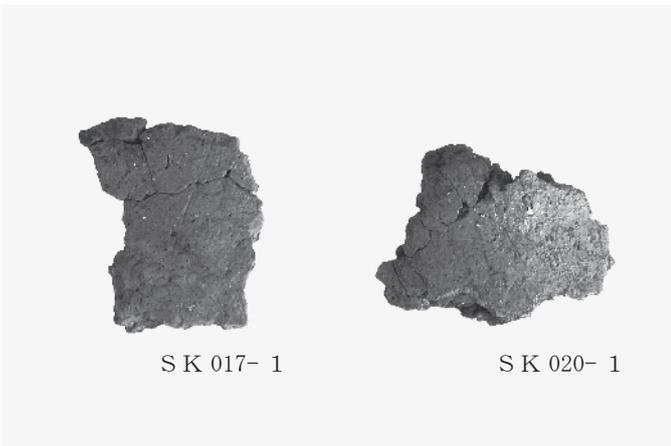
1. SK 020 セクション (北東→)



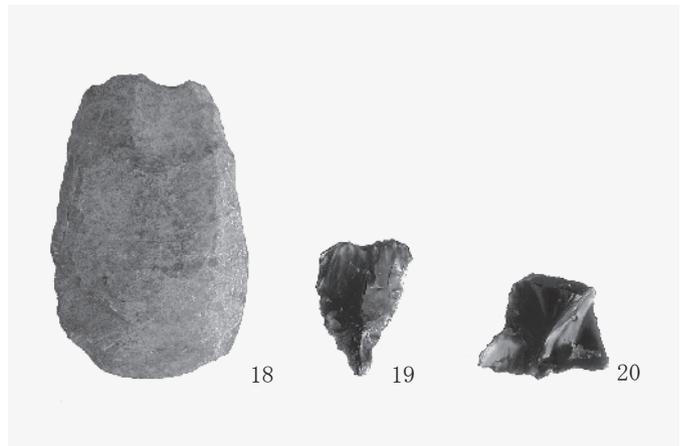
2. SK 020 完掘 (北東→)



3. 遺構外出土 縄文土器



4. 土坑出土 縄文土器



5. 遺構外出土 石器

報告書抄録

ふりがな	たきのくちむこうだいいせき (3)							
書名	滝ノ口向台遺跡 (3)							
副書名	携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	袖ヶ浦市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	鎌田望里							
編集機関	袖ヶ浦市教育委員会							
所在地	〒299-0292 千葉県袖ヶ浦市坂戸市場1番地1				TEL 0438-62-2111			
発行年月日	2018年3月12日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たきのくちむこうだいいせき遺跡	千葉県袖ヶ浦市滝のくちむこうだいいせき口字原井作28番地2	12229	SG123	35° 22' 31"	140° 00' 29"	20170824 ～ 20170831	13.5㎡	記録保存調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
滝ノ口向台遺跡	包蔵地	縄文時代早期・中期	縄文時代土坑3基、時期不明土坑1基	縄文土器・石器 土師器	土坑4基を検出し、うち2基からは縄文時代早期の遺物が出土した。遺構外からは、中期の遺物が多く出土した。			
要約	縄文時代早期と中期の遺構・遺物が出た。昭和63・平成元年度の調査では、弥生時代を中心とした遺跡・遺物が出たため、同時期の集落の広がり想定していたが、今回の調査では確認できなかった。							

2018年3月5日 印刷

2018年3月12日 発行

袖ヶ浦市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集

千葉県袖ヶ浦市
滝ノ口向台遺跡 (3)

— 携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

発行 袖ヶ浦市教育委員会
千葉県袖ヶ浦市坂戸市場1番地1
電話 0438-62-2111
印刷 株式会社弘文社
千葉県市川市市川南2丁目7番2号
電話 047-324-5977

